

大学院創立 20 周年記念の挨拶にかえて

Foreword

大学院文学研究科委員長

中地 幸

Sachi NAKACHI

Chair of the Graduate School Committee

都留文科大学大学院の歴史は、1995 年度に国文学専攻と社会学地域社会研究専攻が設置されたことにより始まる。その後、1998 年度に英語英米文学専攻、2000 年度に比較文化専攻、2003 年度に臨床教育実践学専攻が増設された。したがって本年 2015 年は大学院創立 20 周年の年にあたる。この 20 周年にあたり、英文学科の今井隆教授のはからいで、世界的な言語哲学者ノーム・チョムスキー (Norm Chomsky) 氏の論文を本大学院紀要に掲載できたことは望外の喜びである。それはチョムスキー氏が著名な学者であるというからばかりではない。これこそは今井教授とチョムスキー氏の 40 年以上にわたる学問を通じた友情、信頼関係のたまものであり、国を超えた研究者交流の一つの結晶と思われるからである。

この 20 年という歳月を通し、都留文科大学大学院は、教育と研究の発展と充実に力を入れてきた。長期履修学生制度、ティーチング・アシスタント制度、リサーチ・アシスタント制度などの各種制度の導入や、社会人・現職教員・留学生の受け入れ、学内選抜入試など、様々な改革も積極的に行ってきた。各専攻には専用の図書室が設けられ、貴重な研究資料であるマイクロフィルムも多く収集された。さらに院生室には、コンピュータ機器や無料複写機が設置され、院生の研究環境にも細やかな配慮が払われてきた。学生が研究に専念できるよう、授業料免除制度や奨学金制度など充実したサポート体制を整えてきたことも、都留文科大学大学院の誇るべき特色の一つである。

しかしながら都留文科大学大学院は、今、岐路に立っている。都留文科大学大学院の意義は何なのか、それが目指すべきものは何なのか、それらを見すえた上で、大学院教育を新たに考えていかなければならない。「今、日本の教育は明治維新と同じくらいの激動期にある」と福田誠治本学学長は近著『国際バカロレアとこれからの大学入試改革』のなかで書いている。¹ 日本における学習指導要領、教員免許、教員養成制度の改変は目前に迫っており、これにともなって日本の大学が変わらなければならないことも確かだが、大学院もまた新たに様々な見直しが必要である。

本年度、私が研究科委員長に就任してまず行ったことは「大学院海外研修奨学金制度」の設置であった。これは大学院生が短期間のあいだに海外で調査・研究をしたり、研修に参加したり、学会で発表したりすることを促進し、補助する制度である。学生たちが経済的事情で海外渡航を断念するようなことがあってはならないという考えのもとに設

置した制度である。このような補助は学部ですで行われているが、この制度を活性化するためには学生側の本音も聞いていかなければならないだろう。「行かない」という選択は、そもそも経済的問題だけに限らない。元来、海外留学は意気込みの問題であり、野心を持てるか、夢を描けるかという問題とも密接にかかわっている。

彫刻家イサム・ノグチ (Isamu Noguchi) の父である詩人のヨネ・ノグチ (Yone Noguchi) こと野口米次郎は、とにかく夢が大きかった。英語もろくにできない18歳の青年が金も十分に持たずにアメリカに渡り、アメリカで作家になるという夢を滞米3年で成し遂げるのである。² 野口の親友となった画家の牧野義雄のロンドン生活もその赤貧ぶりがすさまじい。“Analysis of my life. Discouraged? Very often! Disappointed? Always!” と牧野はロンドンでの生活を思い出して書いているが、³ それでもロンドンを愛したからこそ、彼はロンドンで絵を描き続け、一方でそのイギリス体験を英語で出版することができた。日本人として異例のことである。海外で活躍した明治時代の日本人の並々ならぬ意気込みを見ると、21世紀の教育の「維新」には、精神的な意味での啓発活動も必要と思われる。

さて、大学院に関する今後の計画と課題として、まず具体的なことで言えば、広報活動の活発化である。オープン・キャンパスやインターネットを通して、もう少し大学院の存在をアピールしていてもいいだろう。また近い将来に実現すべきカリキュラムに関する課題は、大学院開講コマをすべて半期科目へと変えていくことである。これは大学院生の留学、および留学生受け入れを促進するためにも必要である。日本の大学における「飛び級制度」は既に存在するが、大学4年目に大学院への入学する道筋があることを示していくことも重要であろう。ダブル・ディグリーやダブル・メジャーの可能性も探るべきである。ジェンダー研究プログラムなどの大学院修了書も考えてもよい。他大学院との研究交流などの発展もありうるだろう。副次的なことであるが、図書館の研究書の整備も継続的に行っていかなければならない。オンライン・データベースを増やすなど、まだまだ課題はある。

そして、何より大切なことは教員の研究への支援である。実際、大学院教育ほど、教員の研究者としての質が問われる場所はない。しかしながら誰もが初めから優秀な研究者だったのではない。教員も学び、成長し続けていくのである。この意味で、教員の研究環境を整え支援をしていくことは大学院という研究機関の重要な責務といえる。すでに「共同研究」や、大学院生を「リサーチ・アシスタント」として教員の研究を支援する制度はあるが、応募数が多くないところを見ると必ずしも教員の研究スタイルとマッチしていない可能性がある。制度的なものを見直しながら、さらに必要な研究支援も考えていく必要があるだろう。大学院の真価は、究極のところ、教員の研究成果にかかっている。都留文科大学大学院を、豊かな研究の土壌としていくことこそが、新しい芽を育むために不可欠な条件であると思われるのである。

1 福田誠治『国際バカロレアとこれからの大学入試改革』（亜紀書房、2015）、p.3.

2 Yone Noguchi, *The Story of Yone Noguchi* (London: Chatto and Windus, 1914) を参照。

3 Yoshio Markino, *A Japanese Artist in London* (London: Chatto and Windus, 1912), p. xv.